



ほうさ 第7号

1981年10月

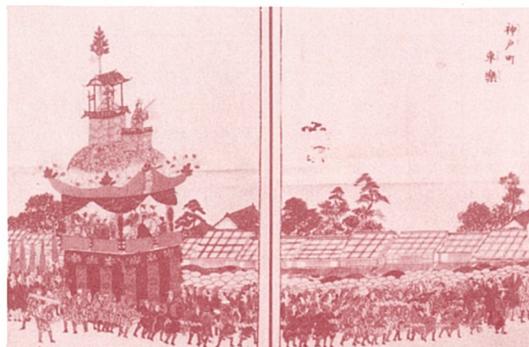
名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

展 示 風 俗 展

祭 礼 と 風 俗 展

10. 3(土)~11. 29(日)

尾張地方には、熱田神宮はじめ真清田（ますみだ）・国府宮・大県・津島・亀尾天王など、古い神社が多く、むかしから祭礼もさかんに行われてきましたが、近世に入って名古屋城下が成り、城内三の丸に東照宮が造営されるに及び、盛大をきわめるに至りました。名古屋城下で、単に「御祭礼」といえば、この東照宮祭を意味するほどでしたが、その始まりは、元和7年（1621）、初代の尾張藩主義直21才のときからです。もっとも、初めのころは、まだ簡素にいとなまれましたが、城下の発展にもなって次第に豪華となり、藩と市民とが協力して祭をもりあげ、各町こぞって趣向をこらした山車や行列をつらね、壮麗な祭礼絵巻をくりひろげるようになりました。熱田神宮もこれに劣らず、東海道随一の宿場であり、尾張最大の魚市場などをもつ派手な土地柄から、立派な山車や馬の塔などをくりだし、娯楽にとほしい時代の民衆をたのしませたわけです。そのほか、津島祭や尾張の一ノ宮真清田神社の祭もユニークな催しで知られておりますが、本文庫には、これらの状況をさながらに伝える古い絵や絵入本、あるいはその由来や沿革を記録した古文献が数多く所蔵されています。さらに、江戸時代における各地の祭や年中行事・風俗なども、この機会にあわせてみていただくために、それらに関する資料も加えました。以上のうち、「張州雑誌」「熱田祭奠年中行事図会」などは肉筆の彩色画、「名古屋名所団扇絵集」や浮世絵の類は、豪華な色刷りの木版となっています。



熱田祭奠年中行事図会

出品目録

〔尾張〕

1. 東照宮御祭礼 (張州雜志 卷20~23)
内藤東甫 江戸中期写(自筆本) 4冊
2. 真清探桃集 佐分清円 (同 卷59~63) 5冊
3. 藤島私記 真野時繩 (同 卷64~67) 4冊
4. 津島年中行事 (同 卷70~73) 4冊
5. 熱田祭奠年中行事図会 江戸末期写 10冊
6. 尾張名所図会 前編
岡田啓・野口道直編 小田切春江等画
天保15年刊 7巻7冊
7. 同 後編
同 明治13年刊 6巻6冊
8. 同 附録〔小治田真清水〕
岡田 啓著 若山善三郎編
昭和5~8年刊 8巻6冊
9. 尾張名陽図会 高力種信(猿猴庵)
昭和15年刊(名古屋史談会) 7冊
10. 御祭礼全書 写(小寺玉晁筆) 1冊
11. 開帳談話 高力種信 写(自筆本) 1冊
12. 名古屋東本願寺御遷仏行列之図
高力種信画 文政6年刊 1枚
13. 尾張年中行事絵抄 秋之部
高力種信 写 1冊
14. 青窓紀聞(第179)
水野正信編 江戸末期写 1冊
15. 三廓細見抄 写 1冊
16. 遊女濃安都 文化4年写 1冊
17. 〔名古屋婦人風俗〕 写(天保4年序) 1冊
18. 名古屋風俗 野村智則編 大正6年写 1冊
19. 若宮祇園祭礼 (名古屋名所団扇絵集の内)
森 玉僊 画 1枚
20. 枇杷島祭礼 (同) 1枚
21. 榎権現祭礼 (同) 1枚
22. 広井八幡祭礼 (同) 1枚

〔各地〕

23. 花洛名勝図会 (東山之部)
木村明啓・川喜多真彦編 松川半山等画
文久2年刊 4巻8冊
24. 華洛細見図絵 初篇 池田東園
文久4年刊 1冊
25. 大和名所図会 秋里舜福(籬島)編
竹原春朝画
寛政3年刊 6巻7冊
26. 摂津名所図会 秋里舜福編
竹原春朝画
寛政8.10年刊 9巻12冊

27. 河内名所図会 秋里舜福編 丹羽桃溪画
享和元年刊 6巻6冊



〔公家・武家〕

28. 禁裏院中年中内々御規式 天明元年写 1冊
29. 冠帽図会 松岡辰方 天保11年刊 1冊
30. 大嘗会便蒙 荷田在満 天明元年写 1冊
31. 東山年中行事 江戸中期写 5巻5冊
32. 殿中年中行事 同 1冊
33. 江戸城中殿中行事 天保6年写 1冊
34. 柳堂年中行事
松葉園英鶴仙編 刊 1冊
35. 元服法式 伊勢貞丈 写〔江戸〕 1冊
36. 草偃和言 会沢 安 喜永5年刊
(徳川慶勝手沢本) 1冊

〔一般庶民〕

37. 増補 江戸年中行事 江戸末期刊 1冊
38. 月次のあそび 菱川師宣画
大正10年刊(稀書複製会・元禄4年版複製) 1冊
39. 天和長久 四季あそび
大正11年刊(同・絵入本複製) 1冊
40. 当世風俗通 金錦先生
大正8年刊(同・安永2年版複製) 1冊
41. 当世かもじ雛形 安部玉腕子
昭和11年刊(同・安永8年版複製) 1冊
42. 彩画職人部類 橘 珉江
大正5年刊(風俗絵巻図画刊行会・安永3年版複製) 2巻2冊
43. 骨董集 山東京伝 天保7年刊(上編) 3巻4冊
44. このころくさ
昭和10年刊(稀書複製会・天和2年版複製) 1冊
45. 所作入
由業入 人倫訓蒙図彙
大正9・10年刊(稀書複製会・元禄3年版) 7巻7冊
46. 絵本宝の縷 勝川春章画
刊(風俗絵巻図画刊行会・天明6年版複製) 1冊
47. 絵本東わらは 南柚笑楚満人作 歌川豊広画
大正6年刊(同・文化元年版複製) 2巻2冊
48. 神無月夷講(破) 三代豊国画 1枚
49. 当流女諸礼躰方 (きやくじんへあいさつのしやう)
一勇齋国芳画 1枚
50. 廓の四季志 よしはらやうじ(三月中の町様)
英泉画 1枚

蓬左文庫には、現在、約8万点の書籍が収蔵されているが、その1点毎に、興味深い伝来事情をともなっている。たとえば、河内本「源氏物語」(重文)などは、金沢文庫の創設者である北条実時が正嘉2年(1258)に源親行本をもって書写させたものであるが、その後、足利義満や、豊臣秀次などの手を経て徳川氏に伝えられたといわれ、時の有力者の間を渡ってきたわけである。——各書籍が付帯している伝来事情は、その書籍を研究する上での重要なポイントであることは言うまでもなく、資料批判における最も基本的な検討事項であるから、本文庫蔵書についても、すべてを明確にすることが望ましいが、残念ながら、以前から蓬左文庫に収蔵されている、という事実のほかは、伝来が不明確なものも少なくない。もちろん、1点1点については、書籍そのもの、あるいは関係記録を丹念に調査すれば、ある程度は明らかになろうが、個々の検討は、その都度の必要にまかせるとして、ここでは、文庫蔵書の内、ある共通の伝来事情を持つ蔵書群についてみてゆきたい。

本文庫の蔵書は、おおむね2種類の記号の連記によって整理されている(各分類目録において、書名の下に掲げたもの、たとえば、金沢文庫旧蔵「続日本紀」は168-1、「落窪物語」は2-11)。この内、最初の番号は、書庫の中に設けられた書架の位置を示す棚番(架蔵番号)で、現在、本文庫では1~79、101~174(途中欠番あり)を使用しており、蔵書の内容を分類する機能には乏しいが、次にあげるものは、伝来を同じくする蔵書を、他と分ける(別置)役割を果たしている。

(棚番)

| | | | | | |
|---------|---------|-----|---------|--------|-----|
| 12 (一部) | 鈴木信吉 | 旧蔵書 | 34~40 | 尾崎良知 | 旧蔵書 |
| 13 | 五味末吉 | 〃 | 54~63 | 伝尾張明倫堂 | 〃 |
| 14 (一部) | 尾張洋学館 | 〃 | 101~104 | 駿河御讓本 | 〃 |
| 31 | 奥村徳(得)義 | 〃 | 166~168 | 〃 | 〃 |
| 32・33 | 水野正信 | 〃 | | | |

もちろん、この外にも「御本」印記により、尾張藩初代義直の蔵書と知られるもの、その他の印記で入庫の時期が推定できるもの(印記については別掲載の「蓬左文庫の蔵書印」を参照)、文庫に残された書籍目録により、たとえば「寛永五年京都買本」という具合に、購入の時期や場所の判明するもの、他にも、「種村肖推寺差上本」「角倉平次献上本」「田安家旧蔵書」「徳川慶勝手沢本」等々、個々の事情をあげればきりがながい、これら、散在するものについては別の機会に譲り、ここでは、棚番によってひとまとまりに区切られている(別置されている)共通の伝来事情をもった蔵書群についてみてゆくことにする。

さて、以上の数字のみで表わされた棚番の他に、特別の記号をもって別置されている蔵書群もある。これも共通の伝来事情を有しているので、次にあげる。

大…………大炊御門家文書

笠…………小笠原流伝書

八木…………八木文書

阪…………阪本鈔之助旧蔵書

中…………中村 修 〃

ナ…………美濃高木家文書

茶…………尾州茶屋記録

小…………小酒井不木文庫

尾…………尾崎久弥コレクション

山…………山田千疇旧蔵書（寄託）

（以上、敬称略）

この他、棚番を用いずに整理番号だけで示されたものに古絵図類があるが、これは共通の伝来事情を持つものでなく、様式上の別置群であるから、ここでは省略する。また、アルファベットを冠した書物は、明治以後の洋装本で、アルファベットは分類を指示しており、これもここでは除外する。

以上みてくると、ここにあげた別置の蔵書群以外のものが、蓬左文庫の根幹をなす蔵書、すなわち、歴代藩主の集書になるもの、というわけで、ここにあげたものは、駿河御譲本以外は、比較的近代に寄贈あるいは所管の移動により文庫に収蔵された、いわゆる幹に対して枝にあたる蔵書群ということになる。根幹よりも枝が先になって恐縮であるが、「枝葉末節」という言葉にはあたらない、重要な蔵書群でもあり、これから数回にわけて、この欄で、とりあげてゆこうと思う。なお、駿河御譲本については、よく知られてもおり、文庫の基盤そのものであるから、歴代藩主の集書について述べる機会に、改めてとり上げようと思う。

〈鈴木信吉旧蔵書〉

尾張藩屈指の兵学者近松茂矩の著作を集めたもので、総数144部（217点）。自筆本ないし手沢本が多い。茂矩（彦之進）は、元禄10年（1697）に生まれ、四代藩主吉通に近侍してその信愛を受け、吉通が開いた全流（一全流ともいう）兵法の伝授を受けたといわれる。のち、長沼流の兵学に傾倒し、錬兵館を立てて門人に教え、これが藩の主流となった。主著に「昔咄」及び「円覚院様御伝十五ヶ条」、そのほか兵書の編述は等身大を超える。南海また丁牧と号して、茶道や俳諧をも好む趣味人で、その方面では「茶窓問話」「南海随筆」などがある。安永7年（1778）没。

鈴木信吉氏は旧藩士の子孫で、長く愛知銀行（現 東海銀行）に務め、監査役にのぼったが、昭和7年、財団法人尾張徳川黎明会の設立にあたり、招かれて専務理事に任じ、徳川家の家令をも兼ねた。中々の蔵書家で、これはその中の主要な集書であったが、黎明会設立後まもなく、本文庫に寄贈された。

〈五味末吉旧蔵書〉

尾張藩にあって代々武家故実方をつとめた五味家の旧蔵書。武器・武具・服飾などについての聞書、考証、絵図類のほか、茶道などに関するものもふくまれ、375部（422点）に及ぶ。

五味末吉氏は、少年時代から徳川家に仕えて家職（家扶）の一員となり、黎明会設立後は、その常務理事を兼ね、戦後まで職務に精励された。この蔵書の文庫への寄贈は、鈴木氏と同じ頃と思われる。

蓬左文庫の蔵書印

その5. 「明倫堂図書」 印記
「尾張洋学館印」

織茂 三郎

明倫堂は、いうまでもなく、天明3年(1783)、尾張藩九世宗睦のときに開設された藩校で、「明倫」の文字は「孟子」(滕文公上)の「夏曰校、殷曰序、周曰庠、学則三代共之、皆所以明人倫也、人倫明於上、小民親於下」から出ている。語感が良いので、他の諸藩にも同名の学校があり、別に、一字ちがいの「明倫館」も少なくないため、混同をさけて「尾張明倫堂」と称する場合もある。さて、天明・寛政年間、尾張の学芸が急速に進展した時代で、多くの学者・

文人を輩出しているが、初代の総裁(のちに督学)に農村出身の、しかも折衷派といわれる細井徳民(平洲)が起用されたのは興味深い。もっとも平洲は、すでに功成り名遂げて老熟の境地に入っていたが……。これより先、寛延元年(1748)、山崎学派の蟹養齋が、八世宗勝の援助のもとに、巾下学問所を設け、宗勝自筆の「明倫堂」の額まで下賜されたが、藩の上層部が養齋を容れなかったため、まもなく廃絶した。それから25年後、正式に藩校としてスタートし、尾張文教の中心となったことは周知の通りである。学長に相当する督学はじめ教授・典籍(助教授)には、平洲に次いで、岡田新川、石川香山、深田香実、冢田大峰、鈴木胤など有数の学者が挙げられ、初めは儒学、のちには国学をも教え、慶応年間(1865~68)には武術の道場も設けられた。学生の数も、初めは50名程度にすぎなかったが、のちには700名に達し、町人や農民も志あるものは聴講を許されたという。文庫も併設され、およそ1万点の書籍をそなえ、「明倫堂御文庫御書目」ほか4種の蔵書目録が本文庫に現存する。これらは明治維新後、主として蓬左文庫と愛知県師範学校(現教育大学)とに分蔵された。別に明倫堂から刊行された「明倫堂版」もあるが、これについては「蓬左No.3」を参照されたい。明倫堂の蔵書印は、タテ56mm、ヨコ24mmの縦長で、「明倫堂図書」とあるが、実際に用いられた例は意外と少ない。

尾張洋学館は、天保年間(1830~44)、藩士上田帯刀(仲敏)が、当時の蘭学界の第一人者伊藤圭介らと協力して、城内三の丸の自邸内(現営林局)に開いた蘭学塾で、多くの門弟をとりたて、柳河春三や宇都宮三郎などの英才を出した。藩立とはいえないが、藩の許可を得た上で、場所も城内にあることから、偏狭な攘夷論者の攻撃も避けられたようである。文久年間(1861~64)、帯刀の病死とともに廃校になったらしく、存続の期間は長くはなかったが、その文化的意義は大きく、近代の幕明けの基盤となっている。館蔵の図書の数は明らかでないが、その一部は本文庫に伝わり、オランダの原書(語学・医学・兵学・地理学・物理学など)をはじめ、「和蘭字彙」(長崎ハルマ)や「洋字篇」などの辞典や入門書類、さらに蘭書の名古屋版など数十点がある。これもユニークで貴重な蔵書群の一つといえる。蔵書印はタテ44mm、ヨコ29mmの長方形で、「尾張洋学館印」とある。



「明倫堂図書」



「尾張洋学館印」

出版物一覽

| | | | |
|----------------------------------|----------|-------------------------------|----------|
| 名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S.50年刊) | 3,500円 | 蓬左文庫重要文化財図録(S.52年刊) | 200円 |
| 名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S.51年刊) | 4,000円 | 日本の古典<蓬左文庫図録>(S.52年刊) | 200円 |
| 名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(S.51年刊) | 2,500円 | 蓬左文庫・源氏物語図録(S.53年刊) | 300円 |
| 尾崎久弥コレクション目録第一～三集 (S.52～55年刊) | 各 1,500円 | 蓬左文庫所蔵古地図複製(S.55～56年刊) | |
| 名古屋叢書(正編)索引・総目録(S.53年刊) | 2,000円 | No.1～No.5 | 各 1,800円 |
| 名古屋叢書続編 索引(S.47年刊) | 700円 | No.6(尾張志付図)愛智郡名古屋東 | 1,800円 |
| 名古屋叢書続編総目録(S.44年刊) | 400円 | No.7(同)同名古屋西 | 1,800円 |
| 善本解題図録第一～三集(S.55年再版) | 各 300円 | 名古屋叢書三編第12巻(S.56年刊) | |
| | | (葎の滴)諸家雑談・家事雑識 | 30,00円 |

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

★本文庫所蔵古地図の精密な複製を作成し、希望者には頒布しています。

★「名古屋叢書三編」(20巻・付1巻予定)の第1回配本ができました。以後、年2～3巻を発行してゆく予定です。全巻ご希望の方は、第1回配本購入の際に、お申し出ください。

▷▷▷ 利用ご案内 ◁◁◁

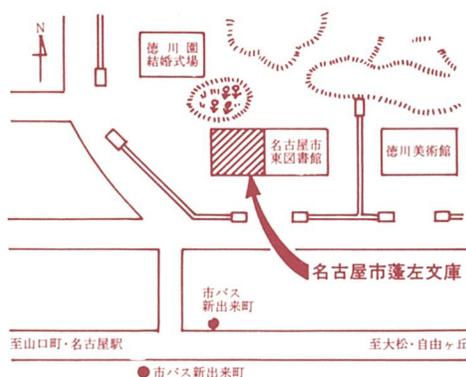
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
(月曜 " " 月・火休館)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部100円)
- ▷展示 常時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないます。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m)
山口町 東 500m)



9月13日より住居表示が変更しましたのでお知らせします。

旧 名古屋市東区徳川町2-27
新 名古屋市東区徳川町1001番地

「蓬左」第7号 ☆昭和56年10月3日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷(東区泉2-3-18)